■インタビュー
共に歩む～総代さん紹介～⑤

# 武志大和尚との運命的出会い

## 瀧澤武雄さん

宿縁とも言うべき不思議な出会いがある。瀧澤武雄さん（76）と善光寺との関係も宿世の因縁としか思えない不思議な出会いから始まった。瀧澤さんは、それを「仏縁」と受けとめている。

「横浜の元町に住んでいたおじさんが亡くなった時に、葬儀社に頼んで来ていただいたお坊さんが善光寺の大圓武志大和尚でした。父と一緒に話をしているうちに、互いに深い関係があることがわかって、ビックリしました」

瀧澤さんの両親は長野県の人。父の祥雄（よしお）さんは須坂、母の好（よし）さんは小諸の出身で、菩提寺は、それぞれ須坂の興國寺と小諸の海応院。いずれも曹洞宗の寺である。ところが何と須坂の興國寺は、武志大和尚の母・嘉（よし）さんの生家。瀧澤さんの祖父は、嘉さんの父親が興國寺住職の時に戒名をつけてもらっている。

武志大和尚との三十五年前の出会いから二年後、父親が亡くなった時、興國寺の住職が長野から横浜まで出られないからというので、武志大和尚が頼まれて葬儀を営むことになった。この再会で二人は互いの因縁の深さを知って驚き、これこそ仏縁のたまものと意気投合した。それ以来、善光寺との関係を深め、武志大和尚

から「手伝ってほしい」と言われて善光寺の世話人となり、後に総代に就く。

やがて瀧澤さんが先祖の墓を守ることになり、須坂の興國寺から十四年前に横浜の日野公園墓地に墓を移した。以来墓参りの度に、善光寺にもお参りをする。

瀧澤さんの母・好さんは昭和二十三年に三十七歳で亡くなり、四人の子どもたちは祖母と父に育てられた。瀧澤さんは東京薬科大学へ進学し、卒業後は横浜の港湾病院や市民病院、市立大学附属病院で薬剤師として三十四年間勤務。五十八歳で退職してからは、友人の経営する薬局で働いた。

▼武志大和尚との出会いを振り返り、「善光寺とは一生つながっている」と話す

武志大和尚からは何かと健康相談を受けたが、それより善光寺の行事に参加するたびに武志大和尚がやさしく仏教について話してくれるのが有難かったという。何度も説教を聞くうちに、だんだん仏教の奥深さと教えの大切さが少しずつ分かってきた。

武志大和尚は、檀信徒が善光寺へお参りしてよかったと思い、喜んで帰ることを願っていた。瀧澤さんも世話人として、武志大和尚の気持ちに添うように心掛けて働いた。「武志大和尚には、いつも他人を思いやる気持ちがあった。誰に対してもわけ隔てなく接し、見守ってくださ

った。武志大和尚は須坂興國寺の墓参りをした時には必ず瀧澤家の墓参りをして下さるという心遣いを忘れなかった。有難いことである。その姿を見て、私もそういう生き方をしたいと思った」と話す。

善光寺へ来ると必ず不動殿と釈迦殿に参拝する。とくに不動尊は「怒りの中に慈悲がある」から好きで、手を合わす。「心が落ち着いている時に拝むと、笑っているように見える。しかし心がもやもやとしている時はこわい」という。

学生時代はラグビーの選手だった。関東医歯薬連盟の試合に出て活躍した。ハードな運動で鍛えた身体は「今になって無理がたたりガタがきた」と言うものの、薬を飲むこともなく、いたって健康に過ごしている。仏壇に武志大和尚の遺影を一緒にまつり、毎日手を合わしている。